

信じられる奇跡

奨励	青山 謙二郎〔おおやま・けんじろう〕
奨励者紹介	同志社大学心理学部教授
研究テーマ	学習心理学、行動分析学、食行動の心理学

イエスが舟に乗り込まれると、弟子たちも従った。そのとき、湖に激しい嵐が起こり、舟は波にのまれそうになった。イエスは眠っておられた。弟子たちは近寄って起こし、「主よ、助けてください。おぼれそうです」と言った。イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」そして、起き上がって風と湖とお叱りになると、すっかり凪になった。人々は驚いて、「いったい、この方はどういう方なのだろう。風や湖さえも従うではないか」と言った。

(マタイによる福音書 8章23―27節)

嵐を静める

聖書のマタイによる福音書第8章の23節から27節を読みました。嵐をイエスが静める話ですが、ここでイエスは弟子たちを叱っています。「信仰が薄い」と。どう薄いのでしょうか。この箇所までの聖書の流れを振り返りましょう。イエスは誕生されて、ガリラヤで伝道を始められ、漁師を弟子にします。その後、おびただしい病人をいやします。もちろん医学によって治療したわけではありません。そして、有名な「山上の説教」に進みます。「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」あるいは「狭い門から入りなさい」といった教えが語られます。その後、ハンセン病をわずらっている人をいやし、百人隊長の僕（しもべ）をいやし、多くの病人をいやします。そして今回、嵐を静めました。嵐に翻弄される船の中で、弟子たちは「主よ、助けてください。おぼれそうです」と言いました。これはむしろ信仰の表れではないでしょうか。たとえば、僕と子どもが嵐の中で船に乗っていても、子どもは「お父さん、助けて」とは言いません。僕が嵐を止められるはずがないからです。しかし弟子たちは助けを求めたのです。ここまでの聖書の流れで先ほど見ましたように、聖書によればイエスはここまでたくさんの奇跡を起こしています。ですから、聖書の登場人物の立場で考えれば、イエスが奇跡を起こす能力をもつことは信じられるのです。つまり、弟子たちは能力への信頼はもっていたのです。では、足りなかったものは何でしょう。それは、イエスの意図への信頼だと言えます。必ず自分たちを救おうとしてくれるかどうか。これが、「薄い信仰」と言われた中身ではないでしょうか。

なぜ原発反対の人びとを説得できなかったか

2011年3月11日の前まで、皆さんは原子力発電所が安全であると信じていましたか。事故より前から、たくさんの人びとが安全を信じずに反対していました。反対派の人たちを推進派の人びとは説得しようとしたが、なかなか成功しませんでした。それはなぜでしょう。心理学者は「信頼が無いから」と説明していました。何に対する信頼でしょう。反対派の人たちを説得するために、電力会社の人は日本の原子力の最高の権威の学者を説明会に呼んで、原発がいかに安全な技術であるかを説明していました。しかし「信頼が無いから」説得できなかったのです。実は、反対派の人たちは、そこで語る専門家の「能力」に関しては信頼していたのです。つまり、説明会に送り込まれてきた人が最高の能力をもつ人たちであることは信じていたのです。しかし、彼らの「意図」を信じていなかったのです。本当に中立な立場で話しているのか、ということが信じられなかったのです。もし、心理学者のこの説明が正しければ、反対派の人たちは間違っていたと、僕は思います。実際には彼らの能力も信じるべきでは無かったのです。彼らは、できないことをできると言っていたのです。能力は信じやすいが、意図は信じにくいのです。私たちは、本当は信じてはいけない、でも信じやすい「専門家」の能力を信じたのだと思います。弟子たちは、本当は信じられる、だけど信じにくいイエスの意図を信じなかったのだと思います。

同志社のクリスマスツリー

今年も同志社のクリスマスツリーがライトアップされていますね。僕は学生時代、同志社大学の学生聖歌隊のメンバーだったので、クリスマスの讃美歌を歌うのが今でも大好きです。いつもクリスマスツリーの点灯式に出るのが楽しみです。今年は授業の関係で出られず残念でした。クリスマスツリーの灯りがとてもきれいですね。でも今年から（2012年）は節電のため短縮しています。同志社のクリスマスツリーの灯りが消えるのはとても悲しいです。悲しい記憶がよみがえります。2005年12月10日の土曜日、痛ましい事件がありました。その日、僕は京田辺のクリスマス讃美礼拝の聖書劇に出ていて、リハーサルが終わった後に、事件のことを聞いたことを覚えています。その朝、宇治市の学習塾で、塾の生徒だった小学校6年生の女の子が刺し殺されました。犯人は、塾のアルバイト講師で、その講師は同志社大学の現役の学生でした。色々な反応がありました。大学は記者会見を開いて謝罪しました。そしてクリスマスツリーは消灯されました。僕は思いました。同志社のクリスマスの灯りはショッピングセンターのイルミネーションと同じなのだと。本当はショッピングセンターとは違うのです。クリスマスツリーは暗闇の中の希望の灯火だと思うのです。同志社女子大学の宗教部のホームページにこのように書いていました。クリスマスツリーの点灯式の案内ですが、「アドヴェントは、希望と喜びをもってイエス・キリストの降誕を待ち望む季節です。クリスマスの心構えをする準備期間ともいえるでしょう。1本のろうそくの光は、暗闇の中に輝く希望です。キリスト教では、イエス・キリストが暗い闇の世に差し込む「光」としてこの世に來られたことを、暗闇にキャンドルを灯してお祝いする伝統があります」とあります。このように、クリスマスのイルミネーションを見るときに、暗闇の中に輝く希望の光と思って欲しいのです。

2011年の福島

京都市の地下鉄の北大路駅から歩いて10分ほどのところに紫野教会という教会があり、僕はその教会の会員です。紫野教会はプロテスタントの教会で、日本基督教団に所属しています。先日、日本基督教団のホームページで見た記事を紹介します。去年の福島の教会のクリスマスです。アンケートで以下のような質問をしていて、その答えが載っていました。原町教会の朴貞蓮牧師からの回答です。福島県の南相馬市にある教会です。原発から30km圏内にあります。2011年クリスマス礼拝での特徴的な出来事、「教団新報」（日本基督教団の機関誌）を通じてアピールしたいこと、という二つの問いへの回答です。「特別に礼拝で特徴的と言えるようなことはありません。例年通りのクリスマス礼拝を捧げることが出来たことが私たちには何よりすばらしい出来事です。当初は原発事故の収束が見通せない中でしたのでクリスマス礼拝を考える余裕もありませんでした。目の前の課題に心が重くなることもありましたが、皆様のお支えによりこの町でクリスマスを祝うことが出来ました。キリストの光がこの町にも照らされていることを深く味わうことが出来ました。7月、8月は教会も保育園も『除染』のことで大いに悩まされ、疲れました。原発から30km圏内にあるということで、それまで遠慮していたボランティアをお願いしましたが、30km圏内にはボランティアを派遣できないということでした。教会員と職員、地域の方、カンパ―ランド長老教会の先生方や東京にある目白教会の青年たちに助けられ第一次の除染をやっと終えました。その大変さと思うと2回目を考えるだけで気が遠くなりそうです。『除染』のための国や東京電力、市からの補助は限りがあり、しかも現実に見合っていません。この町で生きる人たちがいることを引き続き覚えて頂ければ幸いです。戻らざるを得ない人たち、残らざるを得ない人たちの現実があることを祈りの内にお覚え下さると大変心強く思います」（教団新報 4740号 2012年1月21日発行より）。

結び

もう一度、原町教会からの回答を繰り返します。去年のクリスマスの話です。「例年通りのクリスマス礼拝を捧げることが出来たことが私たちには何よりすばらしい出来事です。キリストの光がこの町にも照らされていることを深く味わうことが出来ました」。

2012年12月12日 京田辺水曜チャペル・アワー
「アドベント讃美礼拝奨励」記録